

2019 年度(令和元年度)学校評価自己評価表

| | | |
|---------|------|------------------|
| 向丘 中学校区 | 校番 8 | 福山市立向丘中学校 |
| 最終更新日 | | 2020年(令和2年)2月19日 |

I 福山市

| | |
|-------|--|
| ミッション | 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 |
| ビジョン | 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。 |

II 中学校区

| | | | |
|---|---|---|---|
| 前年度学校関係者評価の主な内容 ・校区共通の指標を設定し、実態や成果課題を整理しており、校区の取組が良く分かった。 ・学び合い学習等により、自分の考えを深めたり広げたりできる児童生徒が増えている。 ・教職員研修や地域とのかかわりは概ね良好である。 ・不登校児童・生徒への取組を推進する必要がある。 | 児童生徒の現状 ・指示されたことはやろうとするが主体的な動きにはなっていない。 ・自己肯定感や自己有用感が低い児童生徒がいる。 ・粘り強く取り組む事が苦手な児童生徒がいる。 ・様々な状況により、不登校になっている児童生徒がいる。 | 育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等 | 主体性 、 自己理解 、 課題発見・解決力 、表現力、情報活用能力、協調性・柔軟性、郷土愛 人とのかかわり合いを大切にし、学ぶ意欲を持ち、 自分の生き方を主体的に考える子ども ○子ども主体の学びに向けた授業づくりを推進する。 ○自分で考え、判断し、決断して行動できる教育活動を創造する。 ○不登校ゼロへの取組を推進する。 |
|---|---|---|---|

III 自校

| | | | | |
|---|---|---|--|---|
| ミッション 自校や郷土に愛着と誇りを持ち、他者とのかかわり合いを大切にし、自分の生き方を主体的に考え、粘り強く実践する生徒の育成 | 育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) | 主体性 | 自己理解 | 課題発見・解決力 |
| 学校教育目標 『自ら気づき、考え、創造し、実践する生徒の育成』 校訓 【自律創生】 | めざす子ども像 1年 より高い目標を立て、よりよい解決に向けて取り組んでいる。 2年 より高い目標を立て、よりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。 3年 より高い目標を立て、他者と協働してよりよい解決に向け粘り強く取り組んでいる。 | 特別活動 主体性、自己理解、課題発見・解決力の育成 ～「すべ」を活用し自ら学び合う授業づくりを通して～ | 自分の長所や短所を理解し、自己の生き方を考えている。 自らの学びの有り様を理解し、よりよい生き方について考えている。 自らの学びや表現の有り様を理解し、よりよい生き方について考え実行している。 | 物事を多面的に見たり、考えたりして課題を設定し追及している。 多様な視点を持って、課題を設定し、様々な方法で追及している。 多様な視点を持って物事を見つめ、課題を発見し、様々な方法で追及し課題解決している。 |
| 現状 <生徒> ○学年や教科によって学力の定着状況にばらつきが見られる。また、思考力・判断力・表現力を問う活用力にやや課題がある。 ○話し合い活動による学びの深まりや広がりが見られた。 ○学校や学級への貢献意識が低く、自己有用感が十分に高まっていない。 ○挨拶・時間を守る・無言清掃の取組については、生徒の意識に温度差が見られ、主体的な活動への高まりにやや欠けている。 <授業> ○課題発見・解決学習に取り組み、思考の「すべ」を意識させ、協働的な学びによる生徒の主体的な学習活動を仕組む授業づくりを推進した。 ○めあて、授業の流れ、振り返りを明示し、生徒が集中して積極的に授業に取り組むことができるよう授業改善に取り組んだ。 | 研究 教科等 主題・内容等 | 特別活動 主体性、自己理解、課題発見・解決力の育成 ～「すべ」を活用し自ら学び合う授業づくりを通して～ | 自らの学びや表現の有り様を理解し、よりよい生き方について考え実行している。 | 多様な視点を持って物事を見つめ、課題を発見し、様々な方法で追及し課題解決している。 |
| | めざす授業の姿 | ○単元を通して、生徒自ら課題を見つけ粘り強く探究する授業 ○思考のすべ(比較、関連付け、分類等)を活用し、他者との協働的な学び合いの中で、自分の考えを整理したり、深めたりすることができる授業 ○授業の終わりや単元の終末において、学習を振り返り、自分の成長を感じることができる授業 | | |

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立 向丘中 学校

| 年目 | 中期経営目標 | 重点 | 分類 | 短期経営目標 | 目標達成に向けた取組 | 評価指標 ●は中学校区共通 | 中間評価(10月1日) | | | 最終評価(2月末) | | | | | |
|----|--|----|----|-------------------------------------|--|---|--|---|------|--|---|---|------|---|--|
| | | | | | | | □指標に係る取組状況 | 力 _セ 達 _成 評価 | 改善方策 | □指標に係る取組状況 | 力 _セ 達 _成 評価 | 総合評価 | 改善方策 | | |
| 3 | 探究する楽しさ、わかる喜びを知る授業づくりを推進し、「主体性」、「自己理解」、「課題発見・解決力」を育成する | ★ | 継続 | ①生徒に基礎的・基本的な学力及び活用的、探究的な学力を身につけさせる。 | ・基礎の確認のための小テストを実施する。 ・定期テストにおいて学力調査の類題や思考力、表現力を問う問題を出題する。 | ●標準学力テストにおいて、全学年、全教科で全国平均を上回る | 全国学力テストにおいて平均正答率が、国語75%、数学61%、英語54%であった。国語、数学は上回り、英語は下回った。 | 4 | 3 | 学力調査の分析から捉えた課題を踏まえ、必要な情報を取り出したり、問題を理解したりする活動や生活場面と結びつくような問題を意図的に仕組む。 | □指標に係る取組状況 ◎短期(中期)経営目標の達成状況 | 3 | 2 | 3 | 話すこと・書くことを通して、既習事項や日常経験、他者の意見をもとに自分の考えを組み立て、表現する取組を充実させる。 |
| | | | ★ | 継続 | ②カリキュラム・マップにおける重点単位において、課題発見・解決学習に取り組み、授業力の向上を図る。 | ・思考のすべ(比較、関連付け、分類等)を活用し、協働的な学び合いの場を作る。 ・自分の成長を感じさせるために、導入や振り返りを工夫する。 | ●生徒アンケート「自分の考えと他人の考えを比較しながら聞いている」「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができる。」の肯定的回答90%以上 | 単元の中で話し合いの場を位置づけ、お互いの考えを交流する活動を行った。 生徒アンケートは、いずれも肯定的回答が79%であり、目標を下回った。 | 3 | 3 | 生徒の疑問や眩きを拾い、主体的な学び合いとなるよう協働学習の工夫改善を図り、「聴き合う授業」に取り組む。また、振り返りの工夫により、考える楽しさや自分の成長を実感させる。 | 「聴き合う授業」に取り組んだ。「自分の考えと他人の考えを比較しながら聞いている」肯定的回答83%、「話し合い活動を通じて、自分の考えを深めたり広げたりすることができる。」肯定的回答82%。前回より上昇した。 | 3 | 3 | 3 |
| 3 | 自ら創る楽しさ、友と伸び合う喜びを知る活動づくりを推進し、「自己肯定感」、「自己有用感」の高揚を図る。 | ★ | 継続 | ③生徒の主体性を引き出し、自らの思いを発信する表現活動を推進する。 | ・学級集団づくりを基盤に、学年や縦割り集団づくりを行う。 ・協働して取り組む場を設定し、フォロワー(協力者)の役割を生徒に意識させる。 | ○生徒アンケート「学級や学校の中で自分の力が役に立った」と感じる生徒80%以上 | 生徒アンケートでは、肯定的回答が66%であった。 自分の役割を意識して主体的に取り組む姿が見られ、学級活動への貢献に係る肯定的回答は82%であった。 | 4 | 3 | 行事の取組が日々の取組に繋がれることを意識させ、生徒会執行部や各種委員の主体的な取組をサポートし、達成できたことを評価する。 | 生徒アンケートでは、肯定的回答が71%であった。前回より5ポイント上昇した。 学級活動への貢献意識や生徒会活動への意識が高まった | 3 | 3 | 3 | 行事や全校集会等で、先輩の姿から学んだことが、日々の活動で実践できるよう、生徒会委員会の充実と活性化を図る。 |
| | | | 継続 | ④生徒の成長や努力を褒めて伸ばす取組を推進する。 | ・各学年、各教科等の取組を掲示したり、交流したりすることで、自分の成長を振り返らせる。 | ○生徒アンケート「自分には良いところがある」「自分の良さは周りから認められている」肯定的回答80%以上 | 学年内で成果を交流した。 生徒アンケートの肯定的評価は70%であったが、昨年度データとの比較で10%向上した。 | 3 | 3 | 全教職員で個々の生徒の良さや頑張りを連携および交流を通して、生徒への肯定的評価を様々な場面で行う。 | 全校で「自己PR」の作成に取り組んだ。「自分には良いところがある」79%、「自分の良さは周りから認められている」73%。前回よりもさらに上昇した。 | 5 | 4 | 4 | 特別活動で行った「自分自身を見つめ自分を知り、友人の理解を通して、自分のよさを考える『自己PR』」をカリキュラムマップに位置づける。 |

| | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|-----|---------------------------------------|--|--|--|---|---|---|--|---|---|---|--|
| 3 | 落ち着いた学習環境づくりを推進し、生徒の学びを支え、人間関係形成力の育成を図る。 | 継続 | ⑤特別支援教育の視点を取り入れたユニバーサル・デザインの授業づくりを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・3分前行動、1分前着席に取り組み集中して授業を開始する。 ・1時間の授業の流れを生徒に示し、授業に見通しを持たせる。 | ○生徒アンケート「落ち着いて(集中して、積極的に、真面目に)授業に取り組んでいる学級」の肯定的評価70%以上 | 教員や生徒の授業前の声掛けにより、1分前着席は96%であった。生徒アンケートの肯定的評価は60%であった。 | 4 | 3 | 1分前着席が自分たちの力でできるようにする。授業の導入時に、授業の流れを見通し、授業に意欲を高める。 | 授業の流れを示してくれていると感じる生徒が87%と見通しを持たせることができた。生徒アンケートの肯定的評価は63%。前回より3ポイント上昇した。 | 4 | 3 | 3 | 校区の児童生徒支援プロジェクトと連動させ、生徒の困り感を減らすための指導の工夫改善を行う。 |
| | | 見直し | ⑥他者とのかわりを大切にさせ、いじめ・不登校の早期発見と早期対応を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・校内ボランティアや地域ボランティアへの参加を奨励する。 ・学期始めの教育相談の充実を図る。 | ○生徒アンケート「人が困っているときは、進んで助けている」の肯定的回答93% ●新たな不登校生徒ゼロ | 学級活動への貢献や助け合いを意識している生徒は約80%であった。生徒アンケートの肯定的回答は90%であった。新たな不登校生徒が2名出た。 | 3 | 3 | 教育相談を充実させ、他者とのより良いかわり方について考えさせる。カール・パーソンズ、学校相談員との連携を密にし、相談体制を充実させる。 | 先生が相談にのってくれれば80%以上の生徒が感じている。生徒アンケートの肯定的回答は85%であった。前回から新たな不登校生徒が3名増加した。 | 3 | 3 | 3 | 生徒の活動を丁寧に見守り、状況に応じた声掛けを行うとともに、他者との良い関わり方を考えさせる。また、集団としての成長を積極的に評価する。 |
| 2 | ふるさとへの愛着と誇りを持ち、地域への貢献意識を育てる。 | 継続 | ⑦自分と地域との関わりについて考え、自分の生き方を主体的に考える。 | <ul style="list-style-type: none"> ・総合的な学習の時間等において、地域の人材や施設を活用した取組を推進する。 ・地域の行事やボランティア活動への参加を奨励する。 | ●生徒アンケート「自分の住んでいる地域が好きです。」の肯定的回答85% | 約50%の生徒が地域行事等への参加をしている。生徒アンケートの肯定的回答は84%であった。 | 3 | 3 | 地域行事や学校周辺を含む美化活動への参加を働きかける。地域の人材や施設を活用した取組を推進する。 | 職場体験や修学旅行の民泊が住んでいる地域の良さを考える機会となった。生徒アンケートの肯定的回答は84%であった。 | 4 | 4 | 4 | 地域の人材や施設を活用したキャリア教育を推進する。生徒会活動や部活動を地域行事と連動させ、活性化させる。 |
| 1 | 教職員の働き方改革の取組を推進する。 | ★新規 | ⑧学校における組織マネジメントを確立し、業務改善・業務削減を推進する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・定時退校日を完全実施するとともに毎日の入退校記録をもとに、勤務時間管理を徹底する。 | ●定時退校日の実施100%。超過勤務時間月45時間以内を90%にする。 | 定時退校実施は、42.3%であった。45時間以内は27.0%であった。 | 2 | 2 | 定時退校日を月間行事予定表および職員室ホワイトボードに記載し相互に意識を持たせる。 | 定時退校実施は、45.7%であった。45時間以内は20.7%であった。目標を大きく下回った。 | 3 | 2 | 2 | 月間行事表、ホワイトボードに記載して定時退校を意識させる。毎日の時間外業務の「見える化」を図り意識させる。 |

| [プロセス評価の評価基準] | | [達成評価の評価基準] | | [総合評価の評価基準] | |
|---------------|--|-------------|------------------------|-------------|--------------------------------|
| 評点 | 評価基準 | 評点 | 評価基準 | 評点 | 評価基準 |
| 5 | 取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。 | 5 | 目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。 | 5 | 100%以上の達成度 十分に目標を達成できた。 |
| 4 | 取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。 | 4 | 目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。 | 4 | 80%以上100%未満の達成度 概ね目標を達成できた。 |
| 3 | 取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。 | 3 | 目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。 | 3 | 60%以上80%未満の達成度 ある程度目標を達成できた。 |
| 2 | 取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。 | 2 | 目標を下回り、成果よりも課題が多かった。 | 2 | 40%以上60%未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。 |
| 1 | 取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。 | 1 | 目標を大きく下回り、成果が認められなかった。 | 1 | 40%未満の達成度 目標を達成できなかった。 |